

氏 名 ごう だ まさ ふみ
 合 田 昌 史
 学位(専攻分野) 博 士 (文 学)
 学位記番号 論 文 博 第 518 号
 学位授与の日付 平 成 18 年 7 月 24 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
 学位論文題目 マゼラン
 ^{デマルカシオン}
 ——世界分割を体現した航海者

論文調査委員 (主 査)
 教 授 服 部 良 久 教 授 南 川 高 志 教 授 小 山 哲

論 文 内 容 の 要 旨

はじめに—「知」をまとうコウモリ

16世紀のポルトガル人マゼランはスペイン国王のもとでコロンブスの3倍の規模の大航海を果たし、初めて西回りのアジア航路を拓いたが、航海の歴史的意義付けについてはコロンブスに比して一段低い評価を与えられてきた。本論はコロンブスとの比較を念頭に置きながら世界分割(分界)という言葉説を体現した航海者としてマゼランの再評価を試みる。16~17世紀の図版や近代の伝記的研究においては、天文航法にすぐれた学者という知的なマゼラン像が形成された。しかしそれらはイベリア半島の外でつくられており、スペイン国王のために航海したポルトガル人としてイベリア半島では近世・近代を通じてコウモリのような扱いを受けてきた。その背景として高価な香料・クローブを産出するモルッカ諸島の領有問題(第2章)があるが、それ以上に注目すべきは1494年のトルデシヤス条約で定められた分界の理念である(第1章)。マゼラン航海の前夜、すでに両国間で分界線は地球の反対側に及ぶという「対蹠分界」の解釈、すなわち世界分割の理念が共有されており、航海の協約に分界への言及が頻出すること、そして航海中に経度が測定されていた事実からも、マゼランの遠征はモルッカ諸島に限定されない広い射程を持っていたと推測される。このことは黄金伝説と太平洋における航跡の分析により論証される(第4章)。遠征先で経度を測り対蹠分界線との位置関係をはかるためには、マゼランと対等な権限を持つ共同総司令官ルイ・ファレイロの「偏角経度法」が必要とされたが、ファレイロは出帆際に排除された(第3章)。ファレイロの穴埋めをした学者やポルトガルから移動してきた地図作成家、航海士の役割、とりわけ彼らの共通認識が政治的枠組みのなかでどのように機能したのかは、マゼラン遠征後にスペイン・ポルトガルの国境で開催された分界の会議の経緯を考察することから明らかになる(第5章)。さらに、16世紀前半のイギリスとフランスが非キリスト教世界を排他的に分配しようとするスペイン・ポルトガルの分界の言説にどのように挑んだかを考察し(第6章)、最後にマゼラン以後の世界分割論と世界計測を展望する(第7章)。

第1章 分界の理念と前マゼランの航海

マゼラン再評価の前提として分界の起源と形成を論ずる。まず、分界の起源が中世イベリアの国土回復運動(レコンキスタ)にあるという説を検討し、西ゴート王国の継承者を自称する12~14世紀のカスティーリャ・レオン王国がアラゴン連合王国とともに「回復」と西方十字軍の理念に拠りながら未征服地分配の諸条約を結び、イベリア半島と北アフリカへの進出を正当化したことを確認する。ただし、ポルトガル王国は分配から排除されていた。また、15世紀西アフリカと大西洋諸島には「回復」の理念の及ばない「未発見」の領域があり、その領域への進出はローマ教皇の贈与が権原とされた。それゆえ、分界の直接の契機は、15世紀後半、先行するポルトガルと後続のカスティーリャ(スペイン)との競合および両者の利害調整の過程にあったとみる。スペインはコロンブス第1回航海の成果によって「発見」地の教皇贈与と分界を得たが、ポルトガルの抗議を受けて分界線の位置を西へ移動することに同意し、のちにポルトガルのブラジル領有の論拠となった。これはスペインの譲歩に見えるが、分界線の東西に2つのフロンティアがつくられたとする分界の本義ではなく、16世紀初頭の両国で共有された対蹠分界の解釈にたつと、地理学パラダイムによって対蹠分界線はガンジス河口にくるため、モルッカ諸島

をふくむアジアの分割でスペインの有利は動かなかった。

第2章 地の果ての外交—16世紀初頭のモルッカ諸島とポルトガル

マゼラン遠征の目標として設定されていたモルッカ諸島を含む香料諸島の地政学的布置を概観したのちに、同諸島に先着したセランらポルトガル人との初期交渉史を再構成する。のちの会議のために用意された供述書や年代記は、モルッカ側の自発的服従と要塞招致およびポルトガルによる「占有」を強調する政治的意図をふくむため、それら史料とモルッカ諸島主権者の書簡等をつきあわせることで要塞招致等の虚構を排して、交渉史の通説が修正される。その結果、テルナテ王権とポルトガルの軍事的取引がモルッカ内の権力構造に動揺をもたらし、マゼランのスペイン艦隊が対抗勢力として引き込まれる余地ができていたことが明らかにされる。

第3章 世界分割のパートナー—マゼランとファレイロ

遠征計画の共同提案者マゼランとファレイロの登場から、計画の採択、出帆に至るまでの経緯を分界の理念が中心に詳細に考察される。1505年以降8年間ほどポルトガル領インドとモロッコで軍人として勤務したマゼランがポルトガルを去った動機は、ポルトガル王の冷遇であり、短期にスペイン王との協約締結に至ったこと背景にはブルゴス派政商の根回しと財務的貢献があったことが、学説の批判的検討により明らかにされる。そのうえで『マゼラン覚え書き』やファレイロ手引き書の内容の分析、およびファレイロ排除の経緯から、マゼランの独創性は「分界のダブルスタンダード」にあったと推測される。すなわち、非キリスト教世界の二等分割の分界解釈にのっとり、ファレイロの経度測定に従ってスペイン有利の対蹠分界観の航海による実証を目指す、その結果が思わしくない場合に備え、分界の本義である東西へ漸進するふたつのフロンティアという解釈にも保険をかけ、モルッカ諸島よりも未発見地への到達を優先させるというのが、地政学的役割を自覚したマゼランの戦略であった。

第4章 遠征の論理と形相

前章の推測を論証するために太平洋横断の航海が再現される。マゼランはモルッカ諸島が赤道直下にあることを知りながら、太平洋横断中に北半球への迂回路を描き、北緯12～13度の航路を維持した。このことと、マゼランが修訂した地理書の分析、および現地航海者から事前に緯度のデータを接収していた可能性等にかんがみて、マゼラン隊は伝説の黄金島と中国南部へつながる東洋針路の知識を求めていた、と推定できる。さらに、ファレイロの代役による経度測定の結果をアルボなどの記録から再現し、二等分割の分界観に照らすと、到達地フィリピン・ブルネイ・モルッカはいずれもポルトガルの分界内にあるという認識が得られていたと考えられる。それゆえ、「発見」地フィリピン中部ビサヤ諸島でマゼランは、フロンティア漸進の分界解釈に立ち返り、その前提であるキリスト教の布教に邁進したが、武威を過信した強圧的な投降勧告は反動を招き、戦死に至った。以後、弱体化したスペイン隊はモルッカ諸島にたどり着いたが、その際に作られた記録と3年後に本国で作られた記録をあわせ読むと、「占有」の論理構築と交渉の実態の両面でポルトガルに立ち後れていたことが明らかになる。

第5章 ポスト・マゼランの分界

ビクトリア号の帰還後に先鋭化したモルッカ問題を解決するため、スペイン・ポルトガル両王権は同諸島の領有権の所在を分界と占有の両面から審議するバダホス・エルヴァス会議を開催した。その記録と関係文書を詳細に検討した結果、対蹠分界線とモルッカ諸島の位置づけに関して両国間に表面上の認識のズレがあるものの、実は対蹠分界線とモルッカ諸島は近接しているという共通認識があったことが判明する。スペイン国王はサラゴサ条約でモルッカへの権利要求を放棄したが、両国は以後もフィリピン・中国・日本などの帰属をめぐる分界の議論を繰り返す。その議論がいかに加熱しようとも、第三国を排除し非キリスト教世界を独占的に二等分割する論理は交渉の決裂を許さなかったのである。

第6章 地図の戦争—挑戦されるデマルカシオン

ビクトリア号の帰還に刺激を受けたフィレンツェ人ヴェラツァーノのフランス隊（1524年）はマゼラン海峡以外の西回り航路を現合衆国東海岸で探索した。この航海は失敗したが、分界の世界地図や外交などから、分界で牽制しあうスペイン・ポルトガルに共通の敵を意識させ、非キリスト教世界の排他的分配を誇示する必要を認識させたと推測される。フランス王フランソワ1世は教皇クレメンス7世から、「贈与」の勅書は既発見地にも適用されるという解釈を引き出し、カルチエの航海（1534年）をあらかじめ正当化した。ホルバインの作品『大使たち』に描かれた地球儀の分界線には、スペイン・ポ

ルトガルの分界を一部容認しながら、北米の未踏地とアジアへの北西航路の発見をめざすフランスの意図が表現されている。

第7章 マゼランの遺産、ファレイロの影

磁気偏角が経度に応じて規則的に増減するという認識に立つ、ファレイロの偏角経度法は、他のヨーロッパ諸国では17世紀初めまでその有効性に期待がかけられていた。しかしこの方法はポルトガル・スペインの一部識者の間では16世紀半ばまでに似非科学と看破され、ファレイロを排除することにより、この方法の呪縛から解放されていたマゼランの遠征では、月食等の天文学的方法による世界計測が用いられた。日食・月食に基づく経度測定は後にポルトガル領インドやスペイン領メキシコ・ペルーなどで組織的に進められた。

おわりに—世界分割の夢

二つの分界論を使い分けて世界分割の体現者となったマゼランに対し、コロンブスは教皇分界の設定に関与しながら独自の分界解釈に固執してスペインに寄与できなかった。その背景にあるのは、ひとつは未征服地の分配を約したレコンキスタの伝統の有無、もうひとつは知的専門職や高級職人とのつながりの有無である。ポルトガルに先んじて黄金島と東洋針路の要所を押さえようとしたマゼランの構想は引き継がれ、マニラ・アカプルコ航路が開かれ、フィリピンにスペインの権力とカトリックが扶植された。分界論を使い分ける手法もなお維持された。発見と占有の競合の舞台裏で非キリスト教世界の排他的分配の議論と交渉は常に保持されており、海洋二強はマゼランが開いた世界分割の夢をしばらく貪ることができた。

論文審査の結果の要旨

太平洋を横断し、世界周航達を前にしてフィリピンで横死した航海者マゼランは、大方の研究者によりコロンブスの事業の単なる継承者と見られてきた。しかし論者によればマゼランは、従来の磁針偏角による（誤った）経度測定法にかわる天文学的な経度測定法を用いた科学的航海者であり、同時に「対蹠分界」について独自の戦略を持つ地政学者でもあった点で、コロンブスを大きく乗り越えていた。本論文はマゼランの評伝的な研究ではなく、トルデシリャス条約（1494年）とそれ以後の「世界分割」（分界と対蹠分界の設定）をめぐるスペイン・ポルトガル間の抗争と交渉を縦軸とし、いわゆる大航海時代の科学・技術と地理的世界認識の発展、それらの担い手たる知的専門職（学者、地図製作者、航海士）、宮廷・官僚などの人的ネットワークを横軸として、マゼラン航海の企画・採用・過程、そしてマゼラン後の両国の分界をめぐる会議の顛末までの歴史の意味を解き明かそうとするものである。論者の考察は、政治史・外交史から交易史まで、航海と分界にかかわるあらゆる領域に及ぶ。コロンブスの場合と同様、マゼランの航海についても奇妙なことに本人の手になる航海記録が現存しない。しかしスペイン、ポルトガル、そして英仏の主要な図書館、文書館において同時代の世界地図、地球儀、航海図、航海記録、書簡、天文学・航海術の書物、国王や高官の文書を博捜し、マゼランの航海とその前後についてほぼぶれのない稠密な実証的考察を貫いた論者の力量と努力は、高く評価される。

以下に本論文の特筆に値する成果と知見を挙げる。

第一に、艦隊の指揮官である航海者と、航海計画の前提である地理的、技術的な知識や情報、あるいはそれらを提供する学者、高級職人との結びつき、交流を詳細に解き明かし、マゼランの航海計画について新たな解釈を提示したことである。経験を積んだ航海者と技術者・知識人、為政者が宮廷に売り込みをかけて集い、交わる、そのような科学・技能・政治と野心が交錯する場を、実証的に再現した論者の力量は評価されてよい。

第二に、そうした考察から生み出された創見として、スペイン王によるマゼランの航海計画の採用は、南米から東アジアまでの距離を極めて短く想定する、スペインに有利な地理的認識を前提とした対蹠分界観を示したことによる、との通説に対し、論者は研究者が殆ど看過してきた「マゼラン覚え書き」に基づき、天地理学者（コスモグラファー）ルイ・ファレイロとの協力関係とその解消をも手がかりとして、マゼランが、最新の地理的知識に基づき、南米の（マゼラン）海峡からモロッカ諸島の間の大洋航海の必要をも認識していたことを明らかにした。すなわち、マゼランはスペインに不利な分界の可能性をも考慮したうえで、その場合には対蹠分界でなく、大西洋の分界線をスタートラインとしたフロンティアの漸進、すなわち発見、占有を優先することを考え、こうして両用の分界論を使い分ける柔軟性としたたかさを持っていたというのである。

第三に論者は、この時期の航海に関わる科学・技術の応用、航海を実現させる人々の行動、その成果の受容と評価が、分

界と対蹠分界を含めた世界分割をめざすスペイン・ポルトガル両国の競合のなかで、否応なく強い政治性を帯びていたことを具体的に明らかにした。スペイン王宮におけるコロンブスの航海日誌改竄（の可能性）もこのコンテキストで理解されねばならないのだが、マゼランは航海において最新の地理的知識と技術を用いつつ、その結果に政治的責任を負わねばならないという、自身の地政学上の役割をも認識していた。マゼランが、伝説的な「黄金島」を、モルッカを補う航海の「隠された目標」としていたこと、そして文字通り墓穴を掘ることになるセブ島の領主たちに対する性急な改宗強制と軍事行動をも、この政治的文脈において明らかにしたことは論者の功績である。

第四は、マゼラン死後、スペイン・ポルトガルのバダホス・エルヴァス会議における対蹠分界をめぐる交渉を、やはり科学と政治が相互作用する場として詳細に解き明かしたことである。双方は地理的認識を「共知」として有したにも関わらず、政治的思惑のゆえに合意は成立しなかったのだが、それにもかかわらず交渉が決裂せず断続的に行われたのは、英仏の脅威に対して、対蹠分界が第三国を排除し、独占的に非キリスト教世界を分配する「談合」の論理に基づくものであったからだ、との論者の指摘は説得的である。

この他にも、モルッカ諸島の政情と交易に関する考察など、本論文にはいくつかの評価に値する創見がみとめられる。しかし他方で、個々の問題に対するきわめて実証的な考察の積み重ねによって組み立てられた本論文では、重要な問題を論じつつも、確認された事実を、広がりを持つ関連と構造のなかに置いて、その意味をより大きな枠組みで考えるという努力は不十分なままに留まっており、この点では叙述に改善の余地があると言わねばならない。しかしそれも膨大な史料を駆使して、多岐にわたる考察を粗密のゆれなく貫いた本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上、審査したところにより本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2006年5月25日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。